

## ミメシス、あるいは 断片としての記憶の効用

——ギリシア語の種山恭子先生のひとつこと——

増 池 功

(1981 年度 B, 1983 年度 M, 1986 年度 D)

近年、たまたま記憶の効用としてつながってきたことがある。そのむかし、文学部の古典ギリシア語や西洋哲学史を担当しておられた種山恭子（くさやま・きょうこ）先生は、中世への影響も大きいプラトンの『ティマイオス』の翻訳と注解を岩波版全集で担当され、アリストアルコスやホワイトヘッドの翻訳もされていた。また、本学英文科出身のファンタジー作家、またエッセイストの稲垣足穂を、新たな天体でも観察するかのようで紹介し直して見せた松岡正剛氏の“オブジェマガジン”『遊』の第一期シリーズでの「ギリシア自然学」特集号への寄稿者でもあった。学部・学科を越えた受講者が顔を見せていたその授業は、現図書館の新設に伴い取り壊された第五別館の南側部小教室棟で、毎週定刻どおり「さあ、そろそろ始めましょか」とのひと声とともに開始されていた。抜けるようなブルーのお召し物を羽織られ、エトナ山の火口に飛び込んだという説もあるエンペドクレスが「好きなんですわ」という先生が、まるで「赤児の手でもひねっているよう」だと、ニコニコ顔で繰り返しておられた授業での記憶とは別に、ある日のこと「ギリシア語は英文科開講の科目」ですよねと、唯一の英文科生に申し渡されたことがあった。前任者が蛭沼寿雄先生であったことさえ知らぬ身で、それ以上の話にもならずじまいであった。「文法だけでは面白くならない」と授業後にプラトン講読会の機会を大学の近所で作ってくださった席でのご発言と記憶する。「ギリシア・ラテン原典叢書」の「アポロギア」、『ソクラテスの弁明』（田中美知太郎編・岩波書店）がまだ手に入った頃である。その後関西を遠

く離れられ、弘前大学に移られた種山先生は1992年8月のロドス島での国際学会で体調に異変をきたされ、重篤な病をおしての學術の活動つづけたのち1995年夏になくなれた。手を入れ続けられていた翻訳原稿がガレノスの『自然の機能について』（1998年出版）である。『ティマイオス』と比較すると発見も多い選択である。単独で翻訳を試みられていたA. A. ロングの『ヘレニズム哲学—ストア派、エピクロス派、懷疑派』（初版1974；邦訳2003）という基本文献の翻訳をみつけ金山弥平氏のあとがきを読んだとき、その後の先生の闘いの詳細を知った。震災の混乱があった時期と重なるとはいえ、虚を衝かれたというか、まさかの思いであった。

その後、その警咳に接したのとは異なる方角から、もっぱら書かれたものだけを通して、新たに思索者としての先生の歩みがゆっくりと現れなおしてきたことは、さらに意外であった。先生にお仕事でもごく身近な存在であった田中美知太郎氏のエッセイや著作にも関心が惹かれていたためか、PDFファイルで諸論考をぼつりぼつり読ませていただくにつけ、師の田中譲りの息の長い論述展開には、もともと自然科学を志されていた先生の注解での鋭いお仕事ともまた違う手応えがあった。「ミメーシス」の概念の見直しという線においては、師の田中が文芸誌『新潮』に連載したエッセイでみせた「ミメーシス」概念の理解にひそむ混乱を衝いた分析考察を、批評的には引き継ぐものである。書き継がれた諸論文、エウリピデスを対象とした論考「嫉妬」（現代哲学の冒険3『差別』、岩波、1990所収）などを読み直し、徐々に教室での記憶、エウリピデスの劇のあれこれの場面に言及されるときの絵も交えての描写ぶりさえ明滅しはじめたが、むしろ文章・文体の姿勢から受ける感銘そのものは、「随筆」という語には尽くせない、エッセイ形式固有の試論性・思考性から来るものかもしれない。いつか、抽象の道の筈の形而上学が實在論とも評されるのなら「危険なのではないか」とF. H. ブラッドリーの哲学について質問したとき、はっきり「そらあ、危険ですよ」と力強く応じられたことを今もよくおぼえている。他方で写生文というより体験談的な感想文、実感一本槍の語り方がエッセイの本分であるとみなされ

るなら、選好される文体も自ずと限られてしまうだろう。矢本貞幹先生の研究にみられるような思想内容より散文形式の自然学的な形態観察が、十分なされてきたとも思えない。英語を学んだはずなのに「因果性」(causality)という翻訳語が「原因」と「効果」ならぬ「原因」と「結果」との因果なる運命だと信じて疑わない人も少なくはないようである。明治以後英語教育の早い段階で何が起こっていたのか、その歴史は、いまだ問われてもいない。

遅延というに余りあるショックの受け方を起点とし、つながってくることは多かった。当時、神学部を失う道をたどった青山学院と縁もある荒井猷氏のグノーシスに渉る聖書文献研究は知られ始めていた。関西学院にこられた桂田重利先生のお仕事にエドモンド・ウィルソンの『死海写本－発見と論争 1947-1969』の翻訳があることは知ってはいたが、なぜウィルソンがそれを書いたのか測りかねていた。「高等批評」とも呼ばれる聖書文献学のありかたが、科学と称するに多々問題を含みながらも、神学に属するというより文献考証の契機をテキスト研究にもたらし、論理学とドグマとの調停という神学作業の外側に読みを置きなおしたという視点は、神学だけではなくロマン派以降の英文学史においても欠かせないものだろう。蛭沼先生の聖書本文学史、また近年完結された新約聖書本文のパピルス研究、著作選集のことなど知り及ぶにつれ、古典学者としての種山先生が古代中心の西洋哲学史とギリシア語を連続して開講され、キリスト教の形成にとって排除的關係でみられているヘレニズムのネオプラトニストたちまでトータルに講じられていた文学原論的な意味合いを、さすがの阿呆も多少は考えるようになってきた。

こうした時代の記憶のひとつの環として、大学院の授業で経験した中條和夫先生の特殊講義、エーリッヒ・アウエルバッハの『ミメシス』(原著 1946)の英訳による忘れがたい授業が改めて気になりだしたのであった。ヨーロッパでの文学形成そのものをあつかい文学原論としてめっぽう面白い授業でありながら、この本を取り上げた先生の狙いを汲み取る余裕は持ち合わせてはいなかった。今となつては、よくもまあ、長い引用を伴うこれほど本格的な文学批評の本を、院生たちに調べさせてくれたものと呆れてしまう

---

のだが、アウエルバッハにして、批評的な史観として、ゲーテに託されるかのようなネオプラトニズムに関する願望なり関心が、強く働いていることも指摘された。その評定の仕方をご記憶にのこされる方もおられることだろう。先生ご自身がアウエルバッハの一面を両義的に再発見し、驚いておられる風情であった。シラバスでは「**“realism”**は批評の用語としてはほとんど意味をなさない」と喝破しておられる。聖書本文研究も背後にあるインターテクスチュアルな描写のタイプの受容史、ことばどうしの模倣の影の読み込みみなおし方を、ひろく考えてのおことばであったろう。

当時、つまり1980年代前半、かもしだされる評判が芳しいものとは到底いえなかったというか、呼称として「解体屋」など、どぎつい語られ方さえ模倣されていた「解体批評」派だが、そのひとりハロルド・ブルームも、大学院では岩瀬悉有先生により取り上げられていたし、大学院の授業に講師として来られていた蜂谷昭雄先生の授業では、記憶だけであれこれの英詩を次々えんえんと板書されるのに仰天するうち、いつの間にかポール・ド・マンのシェリー論まで配布され、「ド・マン、意外とまともですなえ!」、「?」と反応を求められるように何度もおっしゃられていたことが、探究心旺盛なお人柄も思われ、どこか滑稽に思い起こされる。今となつてはスリリングなご発言だった。「ヴァロライゼイション」といった用語や「エコノミメーシス」的な造語についてはともかく、桂田重利先生からは、個人的に、解体批評的な読みが出てくるのはもとのテキスト自体の作られ方からして驚くべきことではないというご認識のお言葉を、やや唐突に聞かせていただいたこともあった。エリオットの論文で二時間を越える口頭試問を受けたときだったと思う。エリオットの詩集の初版本を持参されており、一般には見落とされていたテキストの異同を指摘された。使える部屋の都合がつかず、同席された河村昭夫先生のご判断と、森藤真成先生のご厚意で森藤先生のお部屋を急遽使わせていただくことになった記憶。お忙しいお二人の先生の目線が、互いを追うかのように書棚のガラスの中に整然とならぶ中国古典の書籍たちにくと落ちるや、ジャズの即興演奏のようなタイミングで、短い言葉が美事に

交わされていた。

今は失われてひさしい五号別館の小教室棟部分ではあるが、マスプロ教育の洗礼を受けるかのように加山雄三主演の『海の若大将』（東宝、1965年）で田中邦衛演ずる「青大将」の不正行為が発覚する「京南大学」の、実際の撮影現場は西宮にある建物の片割れとしてではなく、また、成り済ましの「湘南海岸」風のイメージも遥かにこえ、思いはたちのほり、駈けめぐる。

ロゴスとパトスの間に自然学的態度を貫かれようとした種山先生のギリシア語ほか、山崎隆司先生によるコンサイス・オックスフォード辞典必携の英語詩講読など、受講しがいのあるあれこれの苦難と快樂の語学の場として、現図書館の建設のために教えと学びの場が安らかに失われてあることは、建物に切断の跡さえ残す小さな歴史として、もって瞑すべきものがある。

